校注源氏物語

賢木 花散里

中野幸一校注

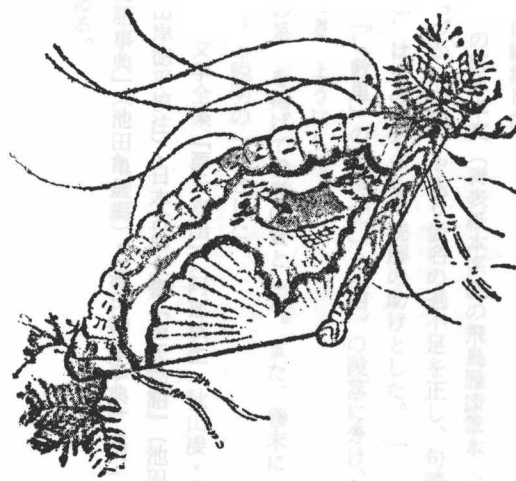
武蔵野書院刊

校注　源氏物語

賢木　花散里

早稲田大学　教授

中野幸一　校注



武蔵野書院刊

平成元年五月三十日　発行

編著者の検印省略

校註　源氏物語　賢木　花散里

定価　五〇〇円

編者　中野幸一

発行者　東京都千代田区神田錦町三ノ十一　前田武

印刷者　東京都千代田区神田神保町一ノ四九　柿崎忠一郎

発行所　東京都千代田区神田錦町三ノ十一　合名会社　武蔵野書院
電話東京(291)四八五九番(代)
振替口座東京九一六七一四六番
郵便番号　一〇一

大文社印刷

ISBN4-8386-0630-3 C3391

凡例

一、本書は、大学・短期大学および高等学校の演習・講読用テキストであることを主眼とし、あわせて一般の方々の講読にも適するように編集した。

一、本書の本文は、『源氏物語大成』の底本本文（青表紙本系統の飛鳥雅康筆本〈大島本〉）により、適宜段落を設け、漢字をあて、仮名づかいの誤りや送り仮名の過不足を正し、句読点・濁点・かぎ括弧などを加えた。また会話文や和歌にはその主を示して読解の助けとした。

一、「賢木」の巻は〔一〕～〔三八〕、「花散里」の巻は〔一〕～〔四〕の段落に分け、その内容の見出しを目次に示して、巻の展開を概観できるようにした。

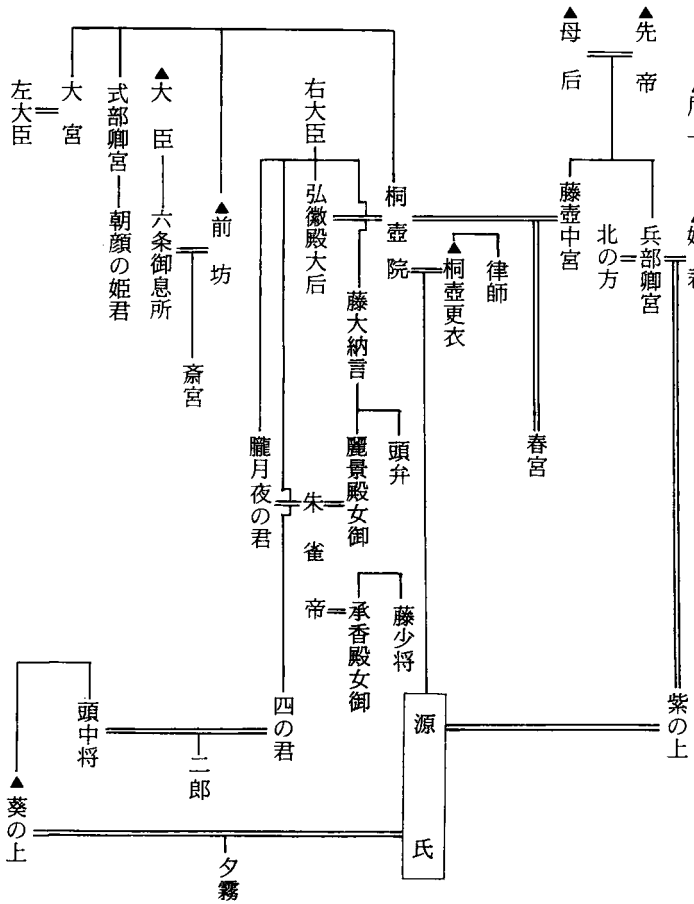
一、巻頭に「賢木」「花散里」両巻の系図を掲げて参考の資とした。また、巻末に「源氏物語年立」を付載して『源氏物語』全編の理解やその説明の一助とした。

一、頭注その他については、日本古典文学全集『源氏物語』（阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳）・日本古典文学大系『源氏物語』（山岸徳平校注）・日本古典全書『源氏物語』（池田亀鑑校注）・『源氏物語評釈』（玉上琢弥著）・『源氏物語事典』（池田亀鑑編）・『源氏物語事典』（岡一男編）等の教示を得た。記して謝意を表するものである。

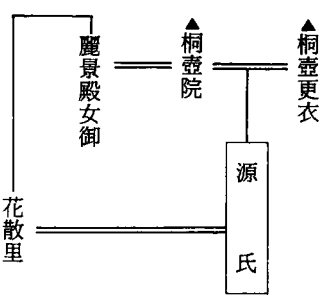
平成元年四月

中野幸一

〔「賢木」の巻系図〕



〔「花散里」の巻系図〕



（▲印は死没した人物）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

〈賢木〉

〔一〕六条御息所、伊勢の下向を決意する……一
〔二〕源氏、御息所を野宮に訪れる……二
〔三〕源氏往時を回想し感慨無量、御息所と和歌を唱和して別れる……八
〔四〕御息所の憂愁と斎宮の気持……一一
〔五〕群行の日、源氏斎宮と消息を交わす……一三
〔六〕御息所、斎宮と共に参内、別れの櫛の儀……一五
〔七〕御息所、斎宮と共に伊勢へ下向する……一六
〔八〕桐壺院重病、帝に遺戒する……一八
〔九〕東宮と源氏、院に参上し訣別する……二〇
〔一〇〕桐壺院崩御……二一
〔一一〕藤壺、三条宮に退出する……二四
〔一二〕源氏の邸、寂寥をきわめる……二五
〔一三〕朧月夜尚侍になる。源氏と心を通わす……二六
〔一四〕左大臣家の不遇、源氏以前と変わらずに訪れる……二八
〔一五〕紫の上の幸福。朝顔の姫君斎院となる……二九
〔一六〕源氏、朧月夜と密会する……三一
〔一七〕源氏、強いて藤壺に逢う。藤壺の悩み……三四
〔一八〕源氏、久々に藤壺の美しい姿を見て自制心を失う……三六
〔一九〕源氏と藤壺の憂悶、藤壺出家を決意して参内する……四三
〔二〇〕藤壺、東宮を愛惜、人知れず訣別する……四五
〔二一〕源氏、雲林院に参籠する……四七
〔二二〕源氏、紫の上と消息を交わす……四九
〔二三〕源氏、朝顔の斎院と消息を交わす……五一
〔二四〕源氏、雲林院を出て帰邸。紫の上女らしく成長する……五三
〔二五〕源氏、藤壺に山の紅葉を贈る……五五
〔二六〕源氏参内、帝と今昔の物語をする。退出時、頭弁源氏を諷する……五七

〔三〕源氏、藤壺の方に参上して和歌を唱和する……六一
〔四〕朧月夜、源氏に消息を贈る……六三
〔五〕故桐壺院の一周忌に、源氏と藤壺哀悼の歌を詠む……六五
〔六〕藤壺の法華八講。果ての日藤壺出家する……六六
〔七〕源氏、出家した藤壺の御前に参上、和歌を唱和する……六九
〔八〕年末の源氏の心境……七三
〔九〕新年、源氏寂寥とした三条宮に参上する……七三
〔一〇〕藤壺・源氏方の人々の不遇。左大臣辞任する……七七
〔一一〕源氏・三位中将、文事に憂悶の情を慰める……七九
〔一二〕源氏、三位中将と韻塞、三位中将負態をする……八一
〔一三〕源氏、朧月夜と密会、右大臣に発見される……八五
〔一四〕右大臣、弘徽殿大后に報告。源氏の放逐を画策する……九〇

〈花散里〉

〔一〕源氏、五月雨の晴れ間に花散里を訪う……九五
〔二〕源氏、中川の辺で昔の女を思い出し和歌を贈答する……九六
〔三〕源氏、麗景殿女御と往時を偲び、和歌を贈答する……九九
〔四〕源氏、西おもてに花散里を訪れる。その人柄……一〇一

一 巻名は、野宮（ののみや）で六条御息所と源氏が交わした歌「神垣はしるしの杉もなきものをいかにまがへて折れる榊ぞ」「少女子があたりと思へば榊葉の香をなつかしみとめてこそ折れ」（七〜八ページ）による。この巻は、源氏二十三歳の秋から二十五歳の夏までのこと。

二 六条御息所の娘。「葵」の巻で伊勢の斎宮になった。斎宮は伊勢神宮に奉仕する未婚の皇女・女王。帝の御代がわりの時に卜定（ぼくじょう）される。

三 伊勢への下向。

四 六条御息所。

五 源氏の正妻葵の上。「葵」の巻で夕霧を出生して亡くなった。

六 正妻が亡くなったので、今まではともかく、今度こそは御息所が正妻の扱いを受けるだろう、と期待したのである。

七 野宮の内部でも。野宮に仕える人々をいう。

八 源氏は葵の上に祟った怨霊が御息所であったことを知って、嫌悪感を抱いた。

九 源氏への断ちがたい恋情や執着。

賢木（さかき）

〔一〕

斎宮（さいぐう）の御下（おくだ）り近うなりゆくままに、御息所（みやすどころ）もの心細く思ほす。やむごとなくわづらはしきものにおぼえたまへりし大殿（おほとの）の君も亡（う）せたまひて後（のち）、さりともと、世人（よひと）も聞こえあつかひ、宮（みや）の内にも心ときめきせしを、その後（のち）もかき絶え、あさましき御もてなしを見たまふに、まことに憂（う）しと思（おぼ）すことこそありけめと知りはてたまひぬれば、よろづのあはれを思し棄（す）てて、ひたみちに出（い）で立ちたまふ。

一 斎宮の下向に母同伴の例として、古注は、円融天皇の貞元二年（九七七）斎宮規子内親王（二十九歳）にその母徽子女王が付き添って下向した史実をあげ、これを準拠と見る。
二 この時斎宮十四歳。
三 斎宮の見放しがたい幼なさを理由に、源氏から離れることを決意。
四 源氏。「葵」の巻冒頭ですでに右大将になっている。
五 御息所も、源氏も。
六 源氏は自分（御息所）を。
七 源氏に逢えば自分（御息所）は。
八 源氏に逢うのは適当ではない。
九 推量表現を用いて御息所の胸中の懊悩を描写。
一〇 御息所の自邸。六条京極にあった。
一一 野宮からほんのちょっとの間お帰りになる時々もあるが。

親添ひて下りたまふ例もことになけれど、いと見放ちがたき御ありさまなるにことつけて、憂き世を行き離れむと思すに、大将の君、さすがに今はとかけ離れたまひなむも、口惜しく思されて、御消息ばかりはあはれなるさまにてたびたび通ふ。対面したまはむことをば、今さらにあるまじきことと、女君も思す。人は心づきなしと思ひおきたまふこともあらむに、我はいま少し思ひ乱ることのまさるべきを、あいなしと心強く思すなるべし。

〔二〕

もとの殿には、あからさまに渡りたまふ折々あれど、いたう忍びたまへば、大将殿え知りたまはず。たはやす

く御心にまかせて参でたまふべき御住処にはたあらねば、おぼつかなくて月日も隔たりぬるに、院の上、おどろおどろしき御なやみにはあらで、例ならず時々なやませたまへば、いとど御心の暇なけれど、つらきものに思ひはてたまひなむもいとほしく、人聞き情なくやと思しおこして、野宮に参でたまふ。

九月七日ばかりなれば、むげに今日明日と思すに、女方も心あわたたしけれど、立ちながらと、たびたび御消息ありければ、いでやとは思しわづらひながら、いとあまり埋れいたきを、物越しばかりの対面はと、人知れず待ちきこえたまひけり。

一 野宮をさす。神域なので、気安く恋の訪れなどはできない。
二 桐壺院。
三 御息所が自分（源氏）を恨めしい人と。
四 他人が聞いても情知らずに思われはせぬかと。
五 斎宮・斎院が、宮城内の初斎院から移って潔斎生活をする宮殿。斎宮の野宮は嵯峨、斎院の野宮は紫野にあった。
六 伊勢下向は九月中の予定なので、あまり遅う時期がない。
七 出立はもう今日明日のように感ぜられるので。
八 立ったままの短い間でもと。
九 さあ、どうしたものか。御息所の思い迷っている気持。
一〇 物越の対面は、従来の二人の仲らしからぬ扱い。

一遙々とした嵯峨野一帯。以下晩秋の嵯峨野の風情が見事な筆致で描出される。
二「浅茅」は丈の低い萱草。
三浅茅ヶ原の「枯れ枯れ」と虫の音の「嘎れ嘎れ」をかける懸詞表現。
四「すごし」はもの寂しくぞっとする感じ。徽子女王（二ページ注一）が野宮で詠んだ歌「琴の音に峰の松風かよふらしいづれのをより調べそめけむ」（拾遺集・雑上）による表現。
五何の楽器か。「こと」は絃楽器の称。
六「艶」は、はなやいだ風情。
七随身は、貴人の外出時に護衛として随従する近衛府の舎人。上皇には十四人、摂関十人、大臣大将八人、納言六人、中将四人、少将二人、衛門・兵衛の督四人、同じく佐二人と定められていた。源氏は右大将なので、公的な場合は八人随従する。
八御息所に対する源氏の細心の心用意。
九源氏の美しい姿に、嵯峨野という場所がらも加わって。
一〇改めて御息所への執着を感じ、過去を悔やむ。
一一外囲いの垣根。
一二屋根を板葺きにした建物。野宮は一代ごとの造営なので仮屋である。

一はるけき野の辺を分け入りたまふより、いとものあはれなり。秋の花みなおとろへつつ、二浅茅が原もかれがれなる虫の音に、四松風すごく吹き合はせて、五そのこととも聞きわかれぬほどに、物の音ども絶え絶え聞こえたる、いと六艶なり。

七睦ましき御前十余人ばかり、八御随身ことごとしき姿ならで、いたう忍びたまへれど、九ことにひきつくろひたまへる御用意、いとめでたく見えたまへば、御供なるすき者ども、九所がらさへ身にしみて思へり。一〇御心にも、など て今まで立ちならさざりつらむと、過ぎぬる方悔しう思さる。ものはかなげなる小柴垣一一を大垣にて、一二板屋どもあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一 樹皮のついたままの丸太で造った鳥居。
二 神域の象徴である鳥居の神々しさに、忍び歩きがはばかられる。
三 警護の衛士が篝火をたく小屋。
四 晩秋の嵯峨野の風情。質素な野宮の様子を目のあたりに見て、源氏は改めてこのような所で長い間憂愁に沈んでいる御息所に同情する。
五 正殿の北側にある対の屋。ここに御息所がいる。
六 訪れた由を告げるのである。
七 音楽の演奏。前に「ものの音ども絶え絶え聞こえたる」（四ページ）とあった。

たりあたり、いとかりそめなり。黒木の鳥居どもは、さすがに神々しう見わたされて、わづらはしきけしきなるに、神官の者ども、ここかしこにうちしはぶきて、おのがどちものうち言ひたるけはひなども、ほかにはさま変はりて見ゆ。火焼屋かすかに光りて、人げ少なく、しめじめとして、ここにもの思はしき人の、月日を隔てたまへらむほどを思しやるに、いといみじうあはれに心苦し。

北の対のさるべき所に立ち隠れたまひて、御消息聞こえたまふに、遊びはみなやめて、心にくきけはひあまた聞こゆ。何くれの人づての御消息ばかりにて、みづから

は対面したまふべきさまにもあらねば、いとものしと思して、源氏「かやうの歩きも、今一はつきなきほどになりにてはべるを思ほし知らば、かう、注連二の外にはもてなしたまはで、いぶせう三はべることをもあきらめはべりにしがな」と、まめやかに聞こえたまへば、人々、女房達「げに、いとかたはらいたう四、立ちわづらはせたまふに、いとほしう」など、あつかひきこゆれば、いさや五、ここの人目も見苦しう、か六の思さむことも若々しう、出でゐむが今さらにつつましきことと思すに、いとものの憂けれど、情なう七もてなさむにもたけからねば、とかくうち嘆きやすらひて、ゐざり出でたまへる御けはひ、いと心に

一　右大将という重い身分。忍び歩きなどは軽々しく不似合いである。
二　野宮の縁で建物の外での扱いをいう。縁語表現。「注連（しめ）」は神域などの区画、区域。不浄のものが神に近付かないように張る縄が注連（しめ）縄である。
三　「いぶせし」は、うっとおしい、気持が晴れない。「あきらむ」はそのうっとおしい気分を晴らす意。
四　「かたはらいたし」は、傍らの人がこちらをどう思うだろうと意識して、気がひける、気がとがめる、の意。ここは気がとがめるほどに源氏が立ちわずらっている様子。
五　さあ、どうしたものだろうか。定めかねて迷っている気持の発語。
六　源氏の思惑。斎宮と解く説もあるが、ここは源氏に対して、今対面してはかえって年がいもなく思われるだろう、という御息所の気持。
七　「たけし」は、はげしく強い意。ここは源氏に対して薄情にもてなすほどの気丈さもない、の意。

一 廂の外側の板敷の縁。
二 簀子に。
三 夕方から出る上旬の月。「九月七日ばかりなれば」（三ページ）とあった。
四 つややかな美しさ。「にほふ」は原義は「丹秀（にほ）ふ」で、赤く色が映える視覚的な美しさをいう。
五 廂と簀子の間にかかっている御簾の下から。
六 「ちはやぶる神垣山の榊葉は時雨に色も変はらざりけり」（後撰集・冬・読人しらず）によった表現。
七 「斎垣を越える」は常軌を逸した一途な恋の表現。「ちはやぶる神の斎垣も越えぬべし大宮人の見まくほしさに」（伊勢物語七十一段）「ちはやぶる神の斎垣も越えぬべし今はわが名の惜しけくもなし」（拾遺集・恋四・人麿）など。
八 源氏が榊を「しるべにてこそ」と言ったのに対して「しるしの杉」を連想する。「わが庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門（かど）」（古今集・雑下・読人しらず）

くし。

源氏「こなたは、簀子（すのこ）ばかりのゆるされははべりや」とて、上（のぼ）りゐたまへり。はなやかにさし出でたる夕月夜（ゆふづくよ）に、うちふるまひたまへるさま、にほひ似るものなくめでたし。月ごろのつもりを、つきづきしう聞こえたまはむも、まばゆきほどになりにければ、榊（さかき）をいささか折りて持（も）たまへりけるを、さし入れて、源氏「変はらぬ色をしるべにてこそ、斎垣（いがき）も越えはべりにけれ。さも心憂（こころう）く」と聞こえたまへば、

御息所「神垣（かみがき）はしるしの杉もなきものをいかにまがへて折れる榊ぞ

と聞こえたまへば、

源氏　少女子があたりと思へば榊葉の香をなつかしみ
とめてこそ折れ

おほかたのけはひわづらはしけれど、御簾ばかりはひき着て、長押におしかかりてゐたまへり。

〔三〕

心にまかせて見たてまつりつべく、人も慕ひざまに思したりつる年月は、のどかなりつる御心おごりに、さしも思されざりき。また心の中に、いかにぞや、瑕ありて思ひきこえたまひにし後、はたあはれもさめつつ、かく御仲も隔たりぬるを、めづらしき御対面の昔おぼえたるに、あはれと思し乱るること限りなし。来し方行く先思

一 前半に「少女子が袖ふる山の瑞垣の久しき世より思ひそめてき」（拾遺集・雑恋・人麿）を、後半に「榊葉の香をかぐはしみとめ来れば八十氏人ぞまとゐせりける」（拾遺集・神楽歌）を引く。

二 廂と簀子との間の御簾を引きかぶっているように、首だけを入れた格好。

三 簀子にいる源氏が御簾の中へ首を入れると、一段高くなっている廂の敷居〈下長押〉（しもなげし）に寄りかかるようになる。

四 御息所。

五 葵の上を死に到らしめた御息所の生霊事件をさす。

一 この段から次段にわたり「女」「男」という呼称が用いられる。純粋な愛の世界での呼称。

二 二人だけのひそかな愛の語らいの直写を避けた推量表現。

三 上旬の月の入りは早い。以下、暗い中で綿々と恋の恨み言を訴える源氏。

四 数々の積り積った恨めしい気持。情事を暗示する推量表現。

五 案の定。源氏に逢えば別離の決意がにぶることは予想されたのだが、やっぱり。

六 若い殿上人たち。

七 野宮には風流好きの殿上人たちがよくやって来るということは「葵」の巻にも記されている。「なる」は伝聞推定の助動詞。

八 「うけばる」は、人に憚らず自信をもって振舞う意で、ここでは、足らぬところなく十分に満たされている様子。

九 物思いの限りを尽くした二人の仲。

一〇 二人の深い愛の語らいを筆舌には尽くしがたいとして省いた省略の草子地。

賢木

し続けられて、心弱く泣きたまひぬ。女[一]は、さしも見えじと思しつつむめれど、え忍びたまはぬ御気色を、いよいよ心苦しう、なほ思しとまるべきさまにぞ聞こえたまふめる。[二]月も入りぬるにや、[三]あはれなる空をながめつつ、恨みきこえたまふに、[四]ここら思ひ集めたまへるつらさも消えぬべし。[五]やうやう今はと思ひ離れたまへるに、[六]さればよと、なかなか心動きて思し乱る。

殿上の若君達[七]などうち連れて、[八]とかく立ちわづらふなる庭のたたずまひも、げに艶なる方に、[九]うけばりたる有様なり。[一〇]思ほし残すことなき御仲らひに、聞こえかはしたまふことども、[一一]まねびやらむ方なし。

一 次第に白む暁方の空は、いつの逢瀬にも恨めしい常套的な景物である。

二 「露けし」は、暁の露に涙をたとえた表現。通常の後朝（きぬぎぬ）とは違って、永遠の別れになるかもしれないこの暁の別れなので、「世に知らぬ」とした。

三 立ち出でにくそうにして。「がてに」は「……しがたく」の意の連語。

四 「松虫」は今の鈴虫。和歌の修辞では、人を「待つ」にかけて恋の情緒を詠む場合が多い。

五 折からの二人の悲しい恋の情緒を知り顔なので。松虫の擬人表現。

六 いい歌が出来そうな風情なのに、心乱れる源氏と御息所では、かえって歌もよめないのであろうか。

七 「秋の別れ」は秋の季節における別れ。

一〇

やうやう明けゆく空のけしき、[一]ことさらに作り出でたらむやうなり。

源氏[二]あかつきの暁の別れはいつも露けきをこは世に知らぬ秋の空かな

[三]出でがてに、御手をとらへてやすらひたまへる、いみじうなつかし。風いと冷やかに吹きて、[四]松虫の鳴きからしたる声も、[五]折知り顔なるを、さして思ふことなきだに、聞き過ぐしがたげなるに、ましてわりなき御心まどひどもに、[六]なかなかこともゆかぬにや。

御息所[七]おほかたの秋の別れもかなしきに鳴く音な添へそ野辺の松虫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com